

テクノランドマークの成立過程

- テレビ塔を中心に -

津 川 康 雄

The Emerging Process of Techno-Landmarks

- Focusing on TV Towers -

Yasuo TSUGAWA

Summary

The development of technology has had many diverse impacts, both positive and negative, on our everyday lives. Although much has been gained from the vast array of developments, we have also encountered drastic changes in our lifestyles. Technological advancements have also directly influenced new forms of architecture, which continue to transform landscapes at an ever-increasing rate. This paper deals with techno-landmarks, in particular large-scale steel towers, as examples of modern landmarks derivative of technological advancements. Detailed examination regarding the circumstances of their construction, will contribute further to the discussion of technological development and wide-spreading consequences of such. TV towers represent both sectors of advancing technology and steel tower construction, and the subject was selected to determine the history and significations of TV tower construction in Japan.

As a result, it has become obvious that TV towers are not merely an architectural structure of technical necessity but also an ideal landmark to coincide with city planning, landmarks, which would become symbolic of urbanization and the city in which they are erected.

It does not only apply to techno-landmarks that all materials are subject to the forces of nature and seemingly perish in the end. It seems the theory is more apparent in techno-landmarks than anything else since they tend to be more affected by the current technological

trends. However, when these landmarks surpassed the status of simple architectural accomplishments of technology, and managed to become urban icons valued by citizens of near and far, then they attain the privilege of continued maintenance and renovation. In this manner, while following the same pass with the development of technology, many techno-landmarks have grown to become symbolic landmarks of the area contributing as spatial beacons for the people who view them. As a consequence, appreciation of the importance and meaning atoned to these techno-landmarks has become a prerequisite for city planners in designing the future landscapes of urban Japan.

- I. はじめに
- II. 技術発達と鉄塔
 - a. テクノスケープの形成とランドマーク
 - b. エッフェル塔の建設経緯
 - c. エッフェル塔の記号論的意味とその効果
- III. 日本におけるテレビ鉄塔建設の過程
 - a. 鉄塔建設の歴史
 - b. 内藤多仲と鉄塔設計
- IV. シンボルゾーンの形成とテレビ塔
 - a. 戦災復興と100m道路の造成
 - b. テレビ塔建設の過程とその意義
 - c. テクノランドマークの時代性
- V. おわりに

I. はじめに

テクノロジーの発達は人々の生活に様々なインパクトを与えてきた。それは種々の評価がなされるものの、その時代の産業・社会を発展させ、人々のライフスタイルを大きく変化させてきた。また、テクノロジーの進歩は新たな構造物を生み出し、地域景観を変貌させることにも結びついた。例えば、産業革命による蒸気機関の発明、その後の鉄道の発達は、乗降客に対する駅を必要とし、特にターミナルは都市や地域におけるゲートとしての役割を果たすことにもなった。駅舎には様々な意匠が施され、建築家がエネルギーを注ぐ対象ともなり、芸術的なその姿が都市や地域の顔として位置づけられるものも多々存在する。鉄路は線状に延び、渡河点や立体交差点には橋梁が設けられ、山地をトンネルが貫通することにより、点と線による新たな景観が生み出された。その様式

テクノランドマークの成立過程

は各要素がリニューアルされることがあっても、21世紀の現在に至るまで本質的には変化することなく世界各地で確認することができる。ある意味では、これまでに存在していた自然景観に人文的要素が深く進入したと見なすこともできる。鉄道の発達にとって欠かすことのできない橋梁（鉄橋）は、鉄骨の組み立て技術が進歩することにより出現した。パリのエッフェル塔の設計者であるギュスターヴ・エッフェルが、類い希なる橋梁（鉄橋）の設計技師であったことはよく知られている。こうして産業革命後の建築物に鉄骨及びその組み立て技術が、コンクリートの製法の完成と共に鉄骨・鉄筋からなる構造物を生み出す基本技術となっていった。

塔は地平面より垂直方向へ延びる構造物であり、その機能はキリスト教寺院における尖塔や仏教寺院における五重の塔のような宗教的意図から造り上げられたものや、通信技術の発達に伴って建設された各種の電波塔や展望塔及び各種のモニュメントに代表される。そこには、本来の機能とは別に、立体的形状が人々のまなざしを集める対象（アイストップ）として、また、塔内に周辺を俯瞰可能な場が設定されるなど新たな要素が付加されている。さらに都市空間における都市軸や道路軸のアクセント・焦点として位置づけられることも多い。そのいずれもが、建築・建造技術の発達に伴い造り上げられてきた。特にフランス革命百周年を記念し、1889年に開催されたパリ万博のシンボルとして建設されたエッフェル塔は都市のシンボルとして、また様々な意味を内包するランドマークとして位置づけられ、その後の鉄塔建設のモデルとなっていった。

他方、我々の空間的な行動・活動を支え、位置を明確化するために空間的なアクセントとして、シンボリックな構造物やランドマークが必然・偶然のもとに配置されてきた^{1・2・3・4}。ランドマークの基本的な特性は地理的空間における自然的・人文的景観構成要素であり、象徴性・記号性・場所性・認知性などの諸特性によって支えられ、人々のもつ空間的座標軸に象徴的に位置づけられる存在となっている^{5・6・7・8・9}。

本稿においてはテクノロジーの進歩により生み出されてきたランドマークを、テクノランドマークと呼ぶことにし、その代表例として大規模鉄塔を取り上げ、鉄塔建設の背景を探り、技術発達と伝播がいかに進化したのかについて言及した。そして、技術発達と鉄塔建設を代表するテレビ塔を取り上げ、日本におけるテレビ塔建設に至る過程とそのもつ意味を明らかにしてみた。また、テレビ塔建設が単に技術的必然性のみならず、都市構造との関連でランドマーク化されていく状況を分析してみた。さらに、都市中心部におけるシンボルゾーンの形成にテクノランドマークが密接に関連し、アイストップとして機能する例を愛知県の名古屋市を中心に考察した。

II. 技術発達と鉄塔

a. テクノスケープの形成とランドマーク

テクノロジーの発達は複合的で、強く各方面への波及効果が促される。一旦社会に受け入れられ定着した技術は、様々な地域へ波及していくことが多い。それは、交通・通信のように鉄道やラジ

オ・テレビといった形で具現化され、受容者の生活に密着・定着化が図られていく。それらを支える様々な構造物がテクノスケープとして認識され、各種のテクノランドマークが生み出されてきた。特に、産業革命後の鉄道交通や自動車交通の発達、近代における新技術や新たな素材の開発に支えられ、急速な進歩を遂げた¹⁰⁾。また、製鉄技術や加工技術の発達は、構造物の建設に大きなインパクトをもたらし、鉄骨・鉄筋・コンクリートの製法の完成は大規模構造物の建設を可能にした。中でも、鉄道や道路建設に欠かせない鉄橋は素材・組み立て技術の発達に支えられ、他の構造物建設にも応用されていった¹¹⁾。衆目を集める地点に建設される鉄橋は、構造上の問題に加えデザインが重視されることも多く、各地にランドマークとしての機能を果たす例を見出すことができる。都市においては都市基盤の整備に様々なテクノロジーが取り込まれ、電気・ガス・上下水道・通信といったライフラインが構築され社会基盤として整備されていった。それらを構成する諸施設は、時代の変化や地域的差異はあるものの、都市景観の新たな要素となっていく。近代以降、都市景観が時代とともに変化していく過程は、テクノスケープの形成に左右されてきたと言っても過言ではない。

その時代に生まれ、育まれた技術は、後世に様々な色と形で伝わることも多い。例えば、日本の近代化が始まる明治時代は、諸外国からの技術を導入し咀嚼した結果、その技術が反映された建築・建造物が数多く造られ、近代化遺産として日本各地に展開している¹²⁾。現在では近代化遺産は単に文化財としての意味にとどまらず、地域景観の要素として、また地域の活性化資産として位置づけられ、まちづくりの資産としての重要性も増してきた。それらは単独で成立することは少なく、時代背景とテクノロジーの進歩との相互関係によって生み出され保存されてきた。

b. エッフェル塔の建設経緯

世界の鉄塔建設において、最も代表的なものはパリのエッフェル塔であろう。エッフェル塔は1889年に建設された高さ300m（建設当初）の大鉄塔であり、セーヌ河左岸のシャン・ド・マルスの一角に当時の最新技術を結集して建設された。シャン・ド・マルスは1867年以降に開催されたパリ万博の主要会場である。建設の目的は万国博覧会のシンボル、モニュメントの創出であり、付随的に様々なテクノロジーの具現化が図られた。設計者のギュスターヴ・エッフェルは1867年のパリ万博から博覧会に関与し、1878年には主会場の大玄関ホールやパリ市展示館などを担当していた¹³⁾。吉見によると、「エッフェル塔は、決してエッフェル個人の発明により突然出現したものではなかった。この博覧会でモニュメント案をエッフェルと競ったジュール・ブルデは、『太陽の塔』と呼ばれる高さ366mの石造りの塔を建て、頂上には反射鏡をつけて下から送った電光を反射させてパリ市を真昼のように照らす計画を立てていた」と説明する¹⁴⁾。完成したエッフェル塔は電気によるテクノロジーが具現化し、地上からエレベータが乗客を運び、各階には電話が取り付けられ、夜にはガス灯、アーク灯、白熱灯によって塔全体が照らし出された。当時の最新技術が具体的な形として表現された展示物と見なすこともできる。こうして、エッフェル塔は万博会場はも

とより、パリを俯瞰する装置として機能することになった。しかし、当初はその後世界各地に必然的に建設されていく電波塔としての機能を果たす意図はなかった。その意味ではラジオ・テレビ電波の送信施設としての先駆的テクノランドマークではないが、大規模鉄塔実現の可能性と建設技術及び鉄塔形状の確立に果たした役割は極めて大きい。現在ではシャイヨ宮からセーヌ河を挟みエッフェル塔とシャン・ド・マルス公園への連続性は万博開催後の新たな開放的な都市空間となり、エッフェル塔がアイストップとしてのランドマーク機能を見事に成立させており、パリのシンボルゾーンの一つとして位置づけることができる（写真1）。



写真1...セーヌ河から見たエッフェル塔（2000年）

c. エッフェル塔の記号論的意味とその効果

フランスの思想家で記号学者のロラン・バルトは、エッフェル塔の持つ意味を記号論から説

明した。すなわち、同塔は人々にパノラマの視界を提供し、新しい視覚と知覚をもたらした¹⁵⁾。それは、慰安にみちた事物となり¹⁶⁾、すべての人々が楽しみを同時に享受できる存在として位置づけられる。この塔は聖なる記念碑ではなく、日常的な生活がそこでくりひろげられるのを禁じるどんな禁忌もありはしない¹⁷⁾。そして、この塔がその訪問者に与えるもの、それは二種類あり、「まず最初は、技術の領域のものであり、第二は技術面の特異さにもかかわらず、塔が親しみのある《小世界》を構成している」と説明する¹⁸⁾。まさにパリのランドマークとしての存在感を獲得していったのである。そして、パリの代表的ランドマークとして知られるルーブル宮殿は君主制に、凱旋門は帝政にとそれぞれ、象徴的な意味を持っている。エッフェル塔もフランス革命百年、万国博覧会などの象徴性を内包するものだが、単に観光対象としてパリの古い石づくりの景観や歴史の深さに対して挑戦的に建設されたと述べている¹⁹⁾。バルトは同塔を、「視線であり、事物であり、象徴であるこの塔は、人間が塔の中に置くすべてのものであり、そしてそのすべては、つきることがない。眺められる見世物であると同時に眺めている見世物、無益でありながらかけがえのない建物、親しい世界であると同時に英雄的な象徴、一つの世紀の証人であると同時にいつも新しい記念碑、そして真似ができないものであるにもかかわらず絶えず再生される事物であるエッフェル塔、.....(以下略)」と説明する²⁰⁾。確かに、エッフェルの考えの中には、同塔を建設するのに際し、様々な意図があった訳だが、本人の想像を遙かに超え、多様性に富む存在となっていたことは疑いない。

このように、大規模な鉄塔は本来の機能とは別に、人々に様々な感慨をもたらすランドマークとしての役割を内包している。もちろんそこには取り巻く環境や建築美といった要素も求められよう。左右対称の均整のとれた立体形状や、構造物を支えるために鉄骨の組み立て形状が結果としてレース模様のような表現に結びつき、錆止めに塗られた塗装の色が独特の雰囲気をかもし出している。言い換えれば、否応なしに空間におけるアクセントやランドマークとなる大規模鉄塔は、景観との調和が必要で、多くの人々に違和感なく受け入れられる存在となることが求められる。

かつて、大規模な鉄塔をはじめとする構造物が建設される際、賛否両論渦巻くのが常であった。特に歴史的景観を有する都市においてその傾向が強い。フランスの作家モーパッサンはエッフェル塔のレストランでしばしば食事をした。その理由は、そこがパリで唯一エッフェル塔を見ないですむ場所であると痛烈な皮肉を込めて語ったとされる²¹⁾。日本においても、1964年（昭和39）に建設された京都タワー（地上高131m）がその例となる。同タワーは京都駅前にあった京都中央郵便局の跡地を利用し、観光事業の振興や地域産業の育成・紹介を目的として設立された京都産業センター（現：京都タワー株式会社）によって建設された。建設に際して市民を巻き込んだ景観論争が展開され、古都京都の景観を損なうという意見が多数寄せられた。その評価は別として、二千万人を超える人達（2001年末）が同タワーの展望室を訪れたという事実は残っている²²⁾。

いずれにしても、先駆的なテクノランドマークとして誕生したエッフェル塔は、多種多様な感慨をフランス人のみならず世界中の人々にもたらした。パリのシンボルとして、直接・間接に莫大な経済効果と膨大な宣伝効果を発揮してきたことは疑いない。そこでは様々なイベントが催され、被写体として観光客等の視線の先に存在し続けている。すなわち、ランドマークが地域づくりに欠かすことができない存在として位置づけられることをも意味する。そのシンボリックな姿や構造は世界各地で模倣されていった。例えば、日本の大阪に造られた初代の通天閣は下部が凱旋門、上部がエッフェル塔を模すなど、エッフェル塔は大規模鉄塔建設のモデルとして世界に伝播・模倣されていった。

III. 日本におけるテレビ鉄塔建設の過程

a. 鉄塔建設の歴史

日本における大規模鉄塔の建設は主に電波の送信施設として始まった。当初は長崎県の針尾島に1923年（大正12）に竣工した海軍無線の送信用アンテナのように、鉄筋コンクリート製の円筒形の構造物が一般的であり、鉄骨造りの鉄塔は昭和以後に多くなったとされる²³⁾。アナログの電波を遠隔地まで送信するためには高塔が必要であり、ラジオ放送、テレビ放送が開始される際に必然的に送信塔が建設された。特に、テレビ放送は1953年（昭和28）に開始され、日本初の商業用テレビ放送のための電波塔が、日本テレビ放送網株式会社によって建設された²⁴⁾。同社の創業者正

テクノランドマークの成立過程

力松太郎は、1952年（昭和27）7月31日にテレビ放送の第一号免許を取得し、総高154m（高さ132m、22mのアンテナが取り付けられた）の日本テレビ塔を東京都千代田区二番町に建設し、同53年8月28日に放送を開始した。テレビ塔には展望台が設けられ、エレベータにより第一展望台（55m）、第二展望台（74m）へ上がることができた。テレビ局見学と一体化したテレビ塔からの展望は多くの人達の見学コースとなった。テレビ塔に展望台が設置される形態は、テレビ塔が単に電波送信の施設にとどまらず、人々に高所からの展望を提供することを可能にしたのであり、その後のテレビ塔建設のモデルになったものと考えられる。しかし、同テレビ塔は、技術発達と社会状況の変化により、1980年（昭和55）に解体され、その使命を終えた。一民間放送局によって建設されたこの鉄塔は展望台も簡素なもので、見学も無料であり



写真2...日本テレビ塔のアンテナ（モニュメント）
（東京都千代田区二番町）

観光目的で建設されたものとは言えないが、日本におけるテレビ塔のプロトタイプとして、またテクノランドマークの代表例として位置づけることができる。ちなみに、解体後はテレビ塔上部に取り付けられていたアンテナがモニュメントとして同地の一角に保存・展示されている（写真2）。

その後、東京では東京タワーが1958年（昭和33）に建設された。当時の郵政省は、都内に次々に建設されるテレビ塔の林立を避け、関東一円にテレビ電波を送信するための電波塔建設を計画した。第二次世界大戦後の復興の証として、人々に自信と希望を与えたいという意図もあったようである。1957年5月に日本電波塔株式会社が設立され、電波塔の建設が始まった。高さ333mの同塔は現在でも自立鉄塔としては世界第1位の高さを誇り、東京のランドマークを代表する総合電波塔となっている。

1953年（昭和28）には名古屋テレビ塔株式会社が設立され、翌54年6月20日に地上180m、展望台90mの鉄塔が完成し、名古屋テレビ塔が営業を開始した。本格的な展望台を備え、観光目的を前面に打ち出したテレビ塔としては現存する中で最も古い。平成元年には鉄塔のライトアップも始まり、周囲に高層建築物が増加し、かつてのアイストップとしてのランドマーク機能は薄れつつあるが、名古屋を代表するシンボル、ランドマークとして位置づけることができる。

同形式のテレビ塔としては北海道札幌のテレビ塔がある。同テレビ塔は1957年（昭和32）8月に完成した。同塔は先の名古屋テレビ塔の建設に触発され、電波塔としての機能はもとより、多目

的利用が可能な施設として計画された。計画都市札幌の条丁目のほぼ原点に近い位置を占め、大通り公園の一角をなすことから、札幌を代表するランドマークとして位置づけられる²⁵⁾。

b. 内藤多仲と鉄塔設計

1953年（昭和28）から始まる日本のテレビ放送は、放送網の整備と受信エリアの拡大とが相まってテクノランドマークとしての大規模テレビ塔を各地に必要とした。その結果、日本の主要都市に新たな景観要素として多種多様なテレビ塔が次々建設されていった。テレビ塔建設に当たっては、日本のような地震や風水害に見舞われやすい自然条件を克服する必要性や、これまでに経験したことの無い高さの克服から高度な設計技術が求められた。中でも日本の主要テレビ塔の設計者として知られるのが内藤多仲 {1886年（明治19）～1970年（昭和45）} である²⁶⁾。同氏は山梨県櫛形町に生まれ、苦勞の末、東京帝国大学建築学科を卒業、その後早稲田大学に勤めた。同氏は地震国日本における高層建築の耐震構造方式を確立したことで知られる。これはアメリカ合衆国へ留学した際、本を詰めたトランクが壊れ、帰国する際に中仕切りを入れると無事だったことにヒントを得たと言われる。その理論をもとに設計された「東京歌舞伎座」や「旧日本興業銀行本店」などが、関東大震災による被害を免れたことがその評価を高めたとされる。同氏は当初からラジオ放送用の鉄塔建設を数多く手がけており、その後、名古屋テレビ塔（昭和29年）、二代目通天閣（同31年）、東京タワー（同33年）など約30の鉄塔建設を手掛け、「塔博士」の異名を取るに至った。ちなみに、名古屋テレビ塔の建設に当たっては、福井市に建てたNHKのラジオ鉄塔が福井地震発生時に倒壊しなかったことに自信を深め、同塔の高さを180mに決定したとされる。その成功が日本最大の東京タワー建設に結びついていった。鉄塔建設に当たっては、大手ゼネコンや実際の作業に従事する人達の努力はもとより、同氏及びその門下生の果たした役割はきわめて大きい。技術の伝播は鉄塔設計の類似性にも結びつき、構造や形態にもその影響を読みとることができる。その意味からも、テレビ塔というテクノランドマークの形成に同氏の設計が大きく関わっている。もちろん設計者の存在のみならず、施工業者の技術や組み立て職人の存在等が相まって大規模鉄塔が各地に建造されていった。

IV. シンボルゾーンの形成とテレビ塔

a. 戦災復興と100m道路の造成

都市のシンボルゾーンの形成とテクノランドマークが密接に関連した例を、愛知県の名古屋市に見出すことができる。都市の地域（内部）構造は時の流れとともに新陳代謝を繰り返し、新たな地区が形成されたり再開発されることによりその姿が変化していく。名古屋は徳川家康による築城後、城下町として発展を遂げ、城郭の南側に碁盤目状に道路を配し町並みを整備した。近世の城下町プランはその後の都市構造に大きな影響を及ぼした。しかし、第二次世界大戦により壊滅的被害を受

テクノランドマークの成立過程

けた名古屋は、戦災復興事業による徹底した土地区画整理を行い、城下町形成時の町並みを継承しつつ、その後の都市構造を大きく変化させていった²⁷⁾。主要な復興計画としては、街路計画、公園緑地計画、その他に分類される。街路計画では、二本の幅員100m道路（久屋大通・若宮大通）を含む50m以上の道路が11本設けられた。その意図は、自動車交通への対応、防災、美観などがあげられる。都心部では、二本の100m道路を南北方向（久屋大通）と東西方向（若宮大通）に配置し、久屋大通にほぼ連続して南北方向に連なる新堀川を含めて都心部を四分割し、防災面を強化した。公園は大小様々整備され、市内に分散していた墓地が一カ所に集められ、平和公園となったことも都市計画の上で特筆される。こうして、名古屋市街地の整備が進んでいった²⁸⁾。

100m道路として整備された久屋大通は当初、防災的な空地帯がイメージされたが、1954年（昭和29）のテレビ塔建設に伴い、その大半が公園緑地化されていくことになった。ここに名古屋のシンボルゾーン形成の端緒を見出すことができる。すなわち、大通りの両側には幅21mの道路が設けられ、中央部は歩行者専用のグリーンベルトを配し、都市公園として整備された。そこには、友好都市から送られた記念物などを中心に国際親善広場が設けられるなど公的空間が整備・充実し、名古屋市のシンボルゾーンないしはシンボル軸の形成が図られた。また、久屋大通は単に公園緑地として整備されるだけでなく、地下部分を利用し、地下鉄、地下街、地下駐車場として複合的に利用されていった。その一角を占める栄は地下鉄東山線、名城線の交差点として、また、1978年（昭和53）に完成した地下街のセントラル・パーク建設に併せて名鉄栄町駅のターミナルが建設されるなど、中心商業地区の機能が強化されていった。同大通りが戦災復興事業により公的空間に変化し、権利関係の錯綜を回避できたこともその開発を促進したものと考えられる。当時の新聞記事によると²⁹⁾、「名古屋の百尺道路久屋大通を掘り返して地下街を造り、名鉄瀬戸線を栄まで延長するこの都心部の大改造工事（栄地区再開発事業）は、ようやく全体工事の60%余をこなした。（中略）重さ三千トンのテレビ塔下とその足元をくり抜く難工事だけに、予測できぬ障害と工事の遅れが心配されたが……」とあり、テレビ塔を含む大改造が行われ、同大通りの重要性がより高まったことが窺われる。さらに1982年（昭和57）には斜張橋形式のセントラルブリッジが桜通に架けられ、桜通によって分断されていた久屋大通の一体感が高まった。1989年（平成元）にはテレビ塔のライトアップが始まり、夜間のシンボルとしての役割も果たすことになった。ちなみに、テレビ塔の外装色は当初から銀色で塗られている。航空法上は高さ60m以上の鉄塔や煙突は赤白（赤黄）に塗り分けることになっているが、同テレビ塔は例外として現在に至っている。また、1989年（平成元）には、フランスのシャンゼリゼ通り（凱旋門～コンコルド広場）と民間主導で友好提携を行っている。道路が都市のシンボルゾーンとして位置づけられる共通性を両者に見出すことができる（第1図）。

このように、久屋大通は名古屋市の戦災復興を象徴する道路として計画造成され、地下には各種都市機能を集積させ、地上は都市公園として位置づけられることになった。そこでは当初からテレビ塔が名古屋のランドマークとして、またアイストップとして存在し続けてきた。名古屋は100m道路とテレビ塔を核とする久屋大通の都市公園化・地下街化により、都心部のシンボルゾーン化

が図られた数少ない都市の例となった。1986年（昭和61）に建設省（現：国土交通省）が日本の道路100選を決定した際に久屋大通が選ばれた理由も、同大通が都市のシンボルロードとして評価されたことに他ならない。とは言え、2000年3月に新たな名古屋のアイストップとなるJRセントラルタワーズ（地上224mの展望台）が名古屋駅に完成し、名古屋テレビ塔の高さを超えたことは時の流れを象徴する出来事となった。



第1図 名古屋中心部の地図（地形図）
（国土地理院 1:25000地形図「名古屋北部（2000）」「名古屋南部（1997）」に一部加筆）

テクノランドマークの成立過程

b. テレビ塔建設の過程とその意義³⁰⁾

テレビ塔の建設は、1953年（昭和28）に愛知県・名古屋市等の出資を仰ぎ、名古屋テレビ塔株式会社が設立され、日本放送協会（NHK）・中部日本放送（CBC）・名古屋財界が協調することにより始まった。総工費2億3千万円、使用鋼材約1000トンが費やされ、1954年（昭和29）6月19日に竣工・翌20日に開業した。建設に至る経緯は、昭和28年に開始されたテレビ放送を名古屋地区で行うための送信施設の建設が目的であり、NHK名古屋放送局と近接する久屋大通の一角が選ばれた。設計を担当した内藤多伸³¹⁾は、パリのエッフェル塔をイメージしつつ、それまでのラジオ塔の設計経験から塔の高さを180mとし、付帯施設として展望台を設けることとした。鉄塔の形式は四角構桁式自立鉄塔であり、本格的な展望台の設置されたテレビ塔としては日本の先駆けとなった（写真3）。同テレビ塔はア



写真3...名古屋テレビ塔

ンテナの乱立を避ける意味から、NHKのみならず民間放送局との共用・集約鉄塔となり、本格的なテレビ放送時代到来のモデルケースとして位置づけることができる。竣工後、1954年8月にNHK総合テレビ、1956年12月にCBCテレビ、1958年に東海テレビが放送を始め、1960年9月にはNHKがカラー放送を開始した。当時のテレビ塔では「見える見える 渥美も伊勢も アルプスも」というキャッチコピーが使用され³²⁾、同塔からの可視的範囲がテレビ

第1表 名古屋テレビ塔建設の経緯と関連事項

昭和28年7月	名古屋テレビ塔株式会社設立
同 28年10月	着工（総工費2億3千万円）、使用鉄材約1000 t
同 29年6月	竣工（鉄塔総高...180m、形式...四角構桁式自立鉄塔） 開業（展望台...地上90m）
同 29年8月	NHK総合テレビ送信開始
同 31年12月	CBCテレビ送信開始
同 32年11月	地下鉄「名古屋 - 栄」開通
同 33年12月	東海テレビ送信開始
同 35年9月	NHKカラー放送送信開始
同 36年9月	NHK教育テレビ送信開始
同 37年4月	名古屋テレビ送信開始
同 40年10月	地下鉄「栄 - 市役所」開通 塔下（12m）を走行
同 43年6月	展望バルコン完成（地上100m）
同 53年11月	セントラルパークオープン（地上公園・地下街）
同 61年6月	建設省「日本の道路100選」に久屋大通が選ばれる
平成元年6月	ライトアップ開始
同 元年9月	「久屋大通」と「シャンゼリゼ大通」が友好提携

名古屋テレビ塔の資料等より作成

電波の受信可能地域とほぼ一致していた。その後は、1968年（昭和43）に地上100mに展望バルコンが完成し、気象並びに大気汚染の観測装置等が設けられるなど多目的な利用が図られている（第1表）。なお、当初の建設条件として久屋大通が都市公園に位置づけられることから、現在に至るまで公的な広報以外のPR活動に塔壁を利用することは許されていない。

名古屋テレビ塔建設の成功は、日本各地に類似の鉄塔建設を促した。それは大きく三つに大別することができる。一つは大規模鉄塔に展望台を設置し、主として観光目的に利用しようとする試みである。この例としては1956年（昭和31）に完成した大阪の通天閣（二代目）があげられる。1943年（昭和18）に初代の通天閣が焼失した後、二代目通天閣の建設機運が盛り上がった。同塔は民間人の手により株式会社が設立され、株券を発行することで建設費を捻出するなど、他では見られない手法がとられた。設計者は内藤多仲であり、103mの鉄塔が初代の場所とは異なる現在の位置に建設された。展望台は91mに設置され、名古屋テレビ塔のものより1m高い位置であったことから、当時は東洋一の展望台として宣伝された。現在でも大阪・新世界のシンボルとして欠かすことのできないランドマークとなっている。民間人の手による同塔は広告塔として大手製作所の名称がイルミネーションによって表示されたり、文字盤の直径5.5m、長針の長さ3.2m、針の重さは1本30kgの大時計が設置され、塔頂部には円筒形二段表示で天気予報が示されるなど、他の鉄塔には見られない特徴を有している。その他、横浜マリントワー（106m）（1961年）、神戸



写真4...札幌テレビ塔と大通公園

ポートタワー（108m）（1963年）など、港湾に隣接する鉄骨・鉄パイプづくりの展望塔が建設された。ちなみに、横浜マリントワーは正式な灯台の役割も担っている。

二つ目は同形式のテレビ塔建設と都市のシンボルゾーンにおけるアイストップの成立である。1957年（昭和32）8月に完成した札幌テレビ塔は、内藤多仲の設計で名古屋テレビ塔と同様に官民一体となり建設され、テレビ放送のみならず教育・文化・科学・観光への利用といった複合的目的が謳われた。名古屋テレビ塔と同様に札幌のシンボルゾーンとして位置づけられる大通り公園の一角に建設され、市民及び観光客のアイストップとしてランドマーク化されている³³⁾。札幌市は計画都市として中心部は条丁目によって明確な街路区画が施されており、四分方位を容易に確認できる。その座標のほぼ原点に位置するのがテレビ塔であり、人々の空間

テクノランドマークの成立過程

認識を支えるランドマークとしての機能も果たしている³⁴⁾ (写真4)。

三つ目は名古屋テレビ塔の成功が、首都東京のテレビ塔建設を促進したことである。設計者である内藤多仲は、名古屋テレビ塔の成功に自信を深め、東京タワーの設計に携わった。塔の高さは関東エリア半径100km圏を受信可能範囲とするために333mと設定された。テレビ塔のモデルとして建設された名古屋テレビ塔はハード面にとどまらず、ソフト面においても大きな影響を及ぼした。それは、濃尾平野と関東平野といった広範囲に及ぶテレビ電波送信の必要性、放送局の増加に伴う集約鉄塔の必要性、大規模鉄塔に展望台を設置することによる観光への寄与といった類似性を見出すことができる。徐々に個別鉄塔が建設されつつあった東京に景観面からも集約鉄塔建設の必要性が高まっていたし、首都東京の観光シンボルとしての可能性が潜在的に存在することを確信させるものであった。東京タワーが建設されてから40有余年を経過し、1億3千万人を超える入場者数を数えている事実は、単なるテレビ塔ではなし得ない存在であったことの証明である (写真5)。



写真5...東京タワー

c. テクノランドマークの時代性

建設からほぼ半世紀が過ぎようとしている日本各地のテレビ塔は、その多くが現在もテレビ電波の送信塔としての役割を果たしている。しかし、札幌テレビ塔のように、送信エリア拡大の必要性から、一部の放送局がテレビ塔からの送信を停止し、他の場所からの送信に移行した例も認められる。テレビ電波の送受信、中継用の鉄塔が受信エリアの拡大等に対応するため、都市周辺の高山頂部等に設けられることが多くなったこともその背景にある。このように、テレビ塔はテクノランドマークのもつ宿命として時代の変化に翻弄されつつある存在となっている。そのため、テレビ塔は本来のテレビ電波の送信施設としての役割とは別に、高さを活かしながら各種の放送・通信電波の送受信・中継点としての機能や、大気汚染等の公害調査に必要な風向・風速・温度計や硫黄酸化物測定器などが設置されている例も多い。また、これまでのアナログ主体の放送システムに変化が生じようとしている。すなわち、テレビ放送のデジタル化が進行しており、地上波デジタル放送の実験放送が始まるようとしている。この技術革新の波は現在のテレビ塔よりも高く頑丈なものを求めること

から、既存のテレビ塔では対応できないことが予測されている。日本各地の都市においても新塔設置が緊急の課題となっており、その成り行きは別として、現在のテレビ塔のテレビ電波送信の役割に大きな変化が生じる可能性は高い。とは言え、戦後のテレビ放送の発展とともに歩んできた各地のテレビ塔は、周囲の建築物の高層化や技術革新に直面しながらも、都市を俯瞰する施設として、また都市のシンボルとしての役割を果たし続けている。

V. おわりに

技術発達に伴って成立するテクノランドマークは、その時代の政治・経済・文化等を背景に生み出されてきた。そこには必然と偶然とが折り重なり、様々な意思決定がタイミングよくなされ、新たな構造物が生み出されていった。本来は機能面が優先されることによって成立するテクノランドマークだが、景観要素として新たなランドマークへ結びついたものも多々存在する。また、個々のテクノロジーが相互に関連し、新たなテクノランドマーク創出に結びつく例も認められる。テクノランドマークは類似性を保持しつつ、様々な地域へ伝播することも多かった。それらは生活に密着した実用性に基づくものであったり、地域のシンボルやランドマークとして位置づけられるものも多い。すなわち、テクノランドマークはその時代の景観形成に大きな役割を果たしている。テクノランドマークは単にテクノロジーの具現化のみならず、人々にランドマークとして認識され、様々な感性を呼び起こす存在にもなった。

テクノランドマークの中には、都市のシンボルとして位置づけられるものも存在し、シンボルゾーンの形成に寄与しているものも多々認められる。その代表例がテレビ塔であった。日本では、1953年のテレビ放送の開始が大規模テレビ塔の建設を促していったが、単にテレビ電波の送信塔としての大規模鉄塔の建設に終始していれば、今日見られるようなシンボリックなランドマークにはならなかったのかもしれない。エッフェル塔建設に端を発する設計者の美的・造形センスと、展望台の設置及びテレビ塔設置位置の選択が大きな意味を持った。例えば、名古屋市においては戦後復興計画における100m道路の造成地にテレビ塔を建設したことが、その後のシンボルゾーン化への端緒になった。また、札幌市における大通公園のシンボルゾーン化に新たなアイストップとしての機能を付加し、ランドマークとなったのがテレビ塔であった。東京芝公園の西端に建設された東京タワーは名古屋テレビ塔の成功を基に展望台を設けたことが、その後の東京観光の拠点となった。完成後40年が経過した1998年に約1億3千万人が同塔を訪れたという事実は、いかに展望台設置の効果が大きかったのかを如実に示している。このように、本来のテレビ電波の送信施設としてのテクノランドマークの機能とは別に、パリのエッフェル塔建設以後、大規模鉄塔がもつ塔からの展望・眺望機能がさらなる魅力を付加した。また、大鉄塔は昼夜を問わずアイストップとしての機能を果たす。とくに夜間の照明・ライトアップは人々の注意機能を引き寄せる効果がある。闇の中に浮かび上がるエッフェル塔や東京タワーは単なるランドマークとしてだけではなく、人々の感性に訴え

テクノランドマークの成立過程

かける存在として位置づけることができる。それは、ランドマークの持つシンボル性が発揮されることにも結びつく。すなわち、テレビ塔は見ることと見られることの両側面を有し、意味ある存在として人々の視覚を刺激し、知覚作用を促すのである。一見、テクノランドマークとは無関係に思える、アメリカ合衆国ニューヨークのリバティ島に設けられた自由の女神像は、独立百周年を記念して1884年にフランスから送られた鉄骨造りの銅製像である。制作者はフランスの彫刻家バルトルディだが、鉄骨の骨組みはエッフェル達の技術が内包されている。しかし、鉄骨の組み立てを基に成形され、表面処理がなされ、女神像としての形が整えられることによって、単なるテクノランドマークとしての存在から象徴的な構造物へと変化する。ある種の芸術品に共通する特性を持つに至ったものと言えよう。言い換えれば、テクノランドマークは人間の知恵と努力に支えられ、テクノロジーの発達を超えた存在へと昇華することもある。

テクノランドマークに限らず、形あるものは何らかの人為的操作が加わらなければ、いずれ変化し消滅する運命にある。時代に翻弄され易いテクノランドマークにその傾向が強いものと考えられる。しかし、近代化遺産のように単なる技術を具現化する構造物を超えた存在となり、人々から支持され高い評価を受ける存在であるならば、引き続き保存され再生（リニューアル）されることも予想される。このように、テクノランドマークはテクノロジーの発達と軌を一にしながらも、人々の空間認識を支え地域における象徴的なランドマークになることも多い。したがって、テクノランドマークの意味と重要性を認識し景観形成に反映させることが、地域づくりにおいても必要になると思われる。

(つがわ やすお・高崎経済大学地域政策学部助教授)

〔註〕

- 1) リンチ(丹下健三・富田玲子訳)『都市のイメージ』、岩波書店、1968、55～113頁。
- 2) 津川康雄『地表空間におけるランドマークとその意義』、立命館地理学9、1997、17～29頁。
- 3) 津川康雄『空間的位置とランドマークの関係』、地域政策研究3-2、2000、21～33頁。
- 4) 津川康雄『位置決定に伴うランドマークの成立過程 - 日本標準子午線を例として -』、地域政策研究4-2、2001、1～14頁。
- 5) 津川康雄『自然的ランドマークとその要件』、地域政策研究 2-1・2、1999、117～131頁。
- 6) 津川康雄『京都の観光要素』、立命館地理学5、1993、17～29頁。
- 7) 津川康雄『ランドマークの形成と地理的慣性 - 城郭を中心として -』、高崎経済大学論集39-3、1996、21～42頁。
- 8) 津川康雄『宗教的ランドマークとその要件 - 大観音像を例として -』、立命館地理学10、1998、49～58頁。
- 9) 津川康雄『宗教的ランドマークの成立過程 - 大観音像を例として -』、地域政策研究1-1、1998、87～101頁。
- 10) 片木 篤『テクノスケープ - 都市基盤の技術とデザイン -』、鹿島出版会、1995、全233頁。
- 11) 前掲10) 105～106頁 「アブラハム・ダービー一世は、セヴァーン河岸のコールブルックデール製鉄所で、世界で初めてコークスを用いた製鉄法を考案し、鉄の大量生産への道を拓いたが、その孫アブラハム・ダー

津川 康 雄

- ビー三世は、製鉄所の傍らに自社で製造した鑄鉄を用いて橋を架けた」ここに世界初の鉄橋が完成した。
- 12) 伊東 孝 『日本の近代化遺産 - 新しい文化財と地域の活性化 -』、岩波新書695、2000、1～38頁。近代化遺産は1993年（平成5）に、重要文化財にあらたにもうけられた種別である。具体的には近代化を担った各種の建造物や工作物を意味し、土木・交通・産業遺産の3種類からなる。
 - 13) 吉見俊哉 『博覧会の政治学 まなざしの近代』、中公新書1090、1992、66～83頁。
 - 14) 前掲13) 76頁。
 - 15) ロラン・バルト（宗 左近・諸田和治 訳、伊藤俊治 図版監修）『エッフェル塔』、ちくま学芸文庫、1997、28頁。
 - 16) 前掲15) 54頁。
 - 17) 前掲15) 52頁。
 - 18) 前掲15) 48～50頁。
 - 19) 前掲15) 82頁。
 - 20) 前掲15) 104～105頁。
 - 21) 前掲15) 7頁。
 - 22) 『京都タワー二十年の歩み』、1979、京都タワー株式会社、全175頁。『KYOTO TOWER 昭和から平成へ躍動の10年』、京都タワー株式会社、1995、全80頁。入場者数は同社資料による。
 - 23) 増田彰久・清水慶一 『ニッポン近代化遺産の旅』、朝日新聞社、2002、212～215頁。
 - 24) 日本テレビ放送網株式会社総務局編 『テレビ塔物語 - 創業の精神を、いま -』、1984、全267頁。
 - 25) 前掲3) 21～33頁。
 - 26) 『日本人名大事典 現代』、平凡社、1979、541頁。『現代人物事典』、朝日新聞社、1977、928頁。
 - 27) 新修名古屋市史編集委員会 『新修 名古屋市史 第七巻』、名古屋市、1998、130～150頁。
 - 28) 伊藤徳男 『名古屋の街 戦災復興の記録』、中日新聞本社開発局、1988、49～222頁。
 - 29) 中日新聞（昭和52年12月8日版）
 - 30) 名古屋テレビ塔株式会社参事酒井正司氏のヒアリング及び各種資料に基づく。また、東京タワーをはじめとする最新の資料やデータはインターネット上のオフィシャル・ホームページによるところが大きい。
 - 31) 前掲26)
 - 32) 前掲27) 457頁。
 - 33) 北海道観光事業（株）編 『札幌テレビ塔二十年史』、1978、全115頁。
 - 34) 前掲3) 21～33頁。

付記) この研究をまとめるにあたり、2001年度高崎経済大学特別研究奨励金『テクノランドマークの諸要件に関する地理学的研究（研究代表者 津川康雄）』の一部を使用した。なお、資料収集にあたり、名古屋テレビ塔株式会社参事酒井正司様、京都タワー株式会社取締役麻田民男様にご配慮をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。なお、本稿中の写真1～5は筆者の撮影による。